

山科家の栗贈答——中世後期の贈与行為に関する一考察——

米澤 洋子

はじめに

中世、特に室町期は、ものを贈る行為が、社会慣行として諸層に浸透した時代であると指摘されて久しい。⁽¹⁾ その中でも美物といわれた食品を贈ることが、室町殿(足利将軍)を頂点とする武家の主従関係を構築、維持するための重要な政治的行為でもあった。⁽²⁾ 「贈与による物流」は中世社会にとって看過できない事象である。⁽³⁾

本稿は古来より万人に嗜好されてきた栗が、山科家という内蔵頭を家職とする中流公家の贈答品として重要な役を担ってきたことの意味を考察するものである。

栗は単に、季節の産物というばかりでなく、その保存性の良さから一年を通じて進物が可能な上に、個数単位で量の調節も可能である。⁽⁴⁾

山科家は、このような栗の特色を活用しながら、少なくとも応永期より天文期までの一世紀に亘り、代を重ね、当主を替えて、いわば

「家」の恒例行事として、禁裏を筆頭に諸方へ栗を贈り続けたのであった。栗が手元に届く日を待ったように一挙になされた贈答行為は、まさしく山科家の「年中行事」というにふさわしい規模のものであった。

むしろこのような「家」の恒例行事は、贈る品すなわち贈答資源の安定的な確保なくしては成立しない。したがって、それが流通品であれ、貢納品であれ、その供給元がまず問題となってくる。かつて盛本昌弘氏は、室町期の多様な贈答儀礼を論ずる上で、献上品の調達や運上費用を課せられた在地の負担体系を、瓜献上を例に明らかにされた。⁽⁵⁾ 山科家の場合も、名字の地である膝下荘園の山科東庄(大宅郷)から納められる年貢の栗がそのまま贈答用に消費されていたのである(以後山科東庄に統一)。

山科家と山科郷に関する研究は、当家に残された豊富な古文書や記録類⁽⁶⁾を活用して、蓄積されてきた。⁽⁷⁾ 本論が取り上げる栗年貢に関して、田端泰子、志賀節子、菅原正子各氏によって度々言及されている

が、それは山科家の経済面の考察や東庄の貢納品の一つとしての分析、あるいは貢納主体である領民とその在地構造を論じることと重点を置くものである。⁽⁸⁾

筆者もかつて、同じ東庄の柿貢納との比較において、贈答品として領主側から設定された栗年貢の特性について論じた。しかし、複数の栗栽培地の規模、貢納後の用途つまり贈答先に関する詳細な考察などには及んでいない。⁽⁹⁾

そこで本論では、東庄が納める年貢の栗が贈答品に転化するシステムも含め、山科家の栗の贈答行為そのものを取り上げ、個々の栽培地の考察に加えて、貢納された栗の贈答先とその変遷について改めて考察を加えたい。さらには、当家の栗贈答の意図を解明することによって、十五世紀を生きた山科家という「家」の一齣を検証したいと考える。⁽¹⁰⁾

第一章 山科家の成立と由緒

一 名字地山科東庄

山科家の成立とその所領については、臼井信義氏の論考を先蹤として、新出の史料により再考察をした菅原正子氏の論考に代表される⁽¹¹⁾ので、両氏の論考に依拠して概略を記しておきたい。⁽¹²⁾

山科家の家祖教成の父は後白河上皇の近臣平業房、母は高階栄子である。⁽¹³⁾ 教成も童時より北面として院に伺候していた。栄子は、夫亡き

後、上皇の寵愛を受け丹後二位と称され、院との間に宣陽門院をもうける。⁽¹⁴⁾ やがて建久三(一一九二)年、栄子教成親子の行く末を案じた後白河上皇は、その死に際して山科小野庄・沢殿以下、諸国二十一箇所の所領を「三代御起請符地」として栄子に譲渡する。教成は栄子の嫡男として山科小野庄・沢殿以下複数の所領を伝領し、勅命により藤原実教の猶子となり冷泉を号する。ここに山科家とその所領が成立したのである。⁽¹⁵⁾

山科家の名字の地である山科東庄は小野庄が東西に分かれた内の小野東庄に当たり、後白河上皇が仁安二(一一六七)年に新御所(離宮)を造営した地であった。⁽¹⁶⁾ 上皇亡き後、教成は寵恩に報いんとして、御所の傍らに御影堂を建て、全ての伝領地を寄進し、山科法住寺殿御影堂領とする。そして毎月、上皇と祭祀のための供料を怠らなかつた。⁽¹⁷⁾ これは同時に後白河院の權威を後盾とする御影堂を本家職となし、自らの領家職を万全なものとする意図もあつたと考えられる。⁽¹⁸⁾

御影堂には後白河院直筆の御影(肖像画)が懸けられていたが、勝定院(足利四代將軍義持)の代に焼亡に及んだので、難を逃れて法住寺殿に移されたようである。⁽¹⁹⁾ その後、御影堂が再建されたかどうかは明確ではないが、山科家の記録には「御影堂代々はか」という記述が散見され、後白河院の墓と山科家代々の墓があつたことがわかる。⁽²⁰⁾ そして毎年七月十三日の盆には墓参と盆供を欠かさなかつたので、或る程度の規模の御影堂があつたとしてよいだろう。応仁年間には懸り(蹴鞠)の場が整備され、雨乞いの池なども作られている。⁽²¹⁾ 『山科家古文書』には、建立当時の御影堂の四至が記載されている。⁽²²⁾ 『北矢倉』『南安合

子」「東赤坂」「西宇治大道」とかなり広範囲であり、これは山科御所の営まれた空間全体に一致するものではないかと考えられる。⁽²³⁾

このように山科東庄は他の地方所領と同様に「三代御起請符地」という優位性が付与される。しかも名字の地であるに止まらず、後白河上皇の御所が営まれた故地でもあり、上皇を祭祀する御影堂を有する別格の荘園であった。従って、その経済的な規模に関係なく、山科家の家格の源泉であり、一門の存立の正当性を担保する本貫地であった。やがて教成の嫡孫資成が早世した鎌倉中期より南北朝期にかけてという両党迭立の治世下で、山科家は太覚寺党の廷臣と持明院党の廷臣の二流に分かれて、家督係争を繰り広げた。そして室町初期の教行の代に一流に帰すまで、山科東庄もその帰趨が幾たびも転変した。やがて教行の嫡子教言の代になると、内蔵頭を独占的に世襲するに至った。⁽²⁴⁾以上のように、山科東庄が有する、「御起請符地」・「山科御所」・「法住寺殿御影堂」という三つの由緒は、当所の栗が山科家の贈答品に供されたことを考える上で、重要な前提であることを指摘したい。その上で、次節では栗の栽培地について検討する。

二 栗の根本栽培地——林殿と大簗

表1は、山科家の当主あるいは家司の日記である『教言卿記』『言国卿記』『山科家礼記』『言継卿記』⁽²⁵⁾を用いて、応永期から天文年間にいたる百二十年にわたって記載された東庄内の栗の栽培地と貢納量を拾い出したものである。

栗年貢がいつより始まったかは不明であるが、応永十四（一四〇七）

表1 山科東庄の栗栽培地別貢納量

年 号	西暦	①林 殿	②大簗・大竹村	③大峯	④四松殿	⑤新宮林	⑥おいちの西林	⑦貢納量のみ	合 計	出典
応永12	1405	○	×	×	×	×	×	×	不明	『教言』
応永13	1406	○	○	○	7 升	×	×	×	不明	『教言』
応永14	1407	○	○	○	○	×	×	×	不明	『教言』
長祿元	1457	×	×	×	×	×	×	×	2 斗以上	『家礼』
寛正 4	1463	4 斗 2 升	2 斗 3 升	×	×	×	×	×	6 斗 5 升	『家礼』
応仁 2	1468	1 斗 4 升	1 斗 1 升	×	×	×	×	×	2 斗 5 升	『家礼』
文明 2	1470	7 升	1 斗 1 升	×	×	×	×	×	1 斗 8 升	『家礼』
文明 4	1472	×	5 升	×	×	×	×	×	5 升	『家礼』
文明 8	1476	×	×	×	×	×	×	100 個	100 個	『言国』
文明10	1478	×	×	×	×	×	×	×	不明	『言国』
文明12	1480	3 斗 9 升 5 合	1 斗 5 升	7 升	×	1 斗	3 升	3 斗 3 升	1 石 7 升 5 合	『家礼』
文明13	1481	3 斗 9 升 5 合	2 斗 2 升	7 升	×	2 斗	3 升	3 斗 3 升	1 石 2 斗 4 升 5 合	『家礼』
長享 2	1488	3 斗 9 升 5 合	2 斗 4 升	7 升	×	×	×	6 斗 3 升	1 石 3 斗 3 升 5 合	『家礼』
延徳元	1489	3 斗 9 升 5 合	2 斗	7 升	×	1 斗	3 升	3 斗 3 升	1 石 1 斗 5 升 5 合	『家礼』
延徳 3	1491	3 斗 9 升 5 合	2 斗 5 合	7 升	×	2 斗	3 升	3 斗 3 升	1 石 2 斗 3 升	『家礼』
明応元	1492	3 斗 9 升 5 合	2 斗 4 升	×	×	2 斗	3 升	3 斗 3 升	1 石 1 斗 9 升 5 合	『家礼』
明応 2	1493	3 斗 9 升 5 合	2 斗 4 升	×	×	1 斗	3 升	1 斗	8 斗 6 升 5 合	『言国』
明応 3	1494	3 斗 9 升 5 合	2 斗 4 升	×	×	1 斗	×	2 斗	9 斗 3 升 5 合	『言国』
明応 7	1498	3 斗 9 升 5 合	2 斗 4 升	×	×	×	×	2 斗	8 斗 3 升 5 合	『言国』
文亀元	1501	2 斗 7 升	1 斗 2 升	5 升	×	1 斗	×	1 斗	6 斗 4 升	『言国』
文亀 2	1502	4 斗 9 升	1 斗 5 升	5 升	×	1 斗	3 升	3 斗 3 升	1 石 1 斗 5 升 5 合	『言国』
大永 7	1527	×	×	×	×	×	×	×	不明	『言継』
天文 2	1533	1 斗 4 升	×	×	×	×	×	1 斗 1 升	2 斗 5 升	『言継』

○記載あり ×記載なし(全て×でも貢納はあり)

出典『教言』=『教言卿記』、『家礼』=『山科家礼記』、『言国』=『言国卿記』、『言継』=『言継卿記』

年九月に納められた栗に対して当主教言が、「小成、昔面影モ無也」⁽²⁶⁾と記述しているので、少なくとも教言の代、あるいは前代、係争中の教兼、教行二流の和睦がなされた康永元(一三四二年)以降に成立したのではないかと考える。⁽²⁷⁾

それでは、史料より検出された表中の①～⑥の栽培地(林)に具体的な考察を加えたい。

①林殿

初出は応永十二(一四〇二年)であるが、山科言国が没する直前の文亀二(一五〇二年)まで、ほぼ一貫して最大貢納量の三斗九升五合を維持した根本栽培地である。この地の栗は常に禁裏に進上され品質的にも安定し、栗贈答の中核を担っていたと思われる。⁽²⁸⁾

林殿の位置を正確に把握することは困難であるが、「林殿」という呼称からは、後白河院の山科御所との関連を想定できる。それについて、『山科家古文書』に、当家が二流に分裂していた時代の興味深い事例が二例ある。早くは正安三(一一三〇)年に出された、大覚寺党後宇多上皇の院宣である。⁽²⁹⁾そこでは「山階東庄無量光院上御所」の帰属が問題になっている。また一つは、康永元(一三四二年)に持明院党の光厳上皇が出した和睦勅許の院宣とともに、大覚寺派の教兼から教行に提出された契状である。⁽³⁰⁾それには「山科東庄内無量光明院林」の返却が約されている。この二箇所は同一の場所と考えられ、無量光院(或いは無量光明院)と称された上御所が半世紀の歳月を経て、林となった状況が推測できる。山科御所遺跡の林はこの段階で教言の父教行に戻され、貞和二(一一三四年)年、教行は「山科」の称号の勅許を得る。

最終的に教行が没し、教言が四十五才で家督を継いだ応安五(一二三二年)に、足利義満から山科東庄安堵の御判御教書を得て、全所領は嫡男教言の一円知行となる。やがて永徳三(一三八三年)には、「御服奉行」(内蔵頭)を家職とすべきことも許される。⁽³¹⁾

このように見るならば山科家の嫡流にとつて、山科東庄内の無量光院林は象徴的ともいえる存在であった。その跡地の林を「林殿」と呼び、栗の栽培地となし、毎年、収穫される栗を内蔵頭として禁裏に進上することは、当家の由緒を再生産することであったと考える。「林殿」は他の栽培地に比べて、特別の由緒があったのである。

近世に刊行された『山城名勝志』では、山科御所の位置を大宅村と大塚村の間の「御所森」⁽³²⁾とし、当所の氏神山もまた「御所山」と呼ばれていると解説している。又『山科町誌』⁽³³⁾によれば、近年まで、大宅の小字名に広御所、唐門、中の御所、泉殿に加えて林殿があったとし、御所森を地図上で比定している。やはり「林殿」は後白河上皇の上御所の遺跡の林であり、宇治大道以东の御所山の麓であったと推測する。

②大簀(後に大竹村)

①の「林殿」と並ぶ応永期よりの根本栽培地であり、大簀の名称通り、周辺は山科盆地の特色をなす竹林であり、後にはもっぱら大竹村と呼ばれていた。当地に関しては『教言卿記』に「宮前」⁽³⁴⁾という割注があるので、当地の鎮守社である東岩屋神社の前と確定できる。現在の地形からみても傾斜地であったと思われる。栗の貢納量は応永期は不明であるものの、寛正年間の二斗三升を経て、文明十二年の段階では二斗四升に定められてた。しかし、徐々に未進が発生し、文龜年間

には一斗五升に減少している。そもそも大竹村は「小林」「大林」の二ヶ所の林からなっており、個別の貢納分を地下の政所が一括して納めていた。⁽³⁵⁾

「小林」は政所屋の南に位置し、庄内の寺庵衆の一人である桂正庵が預かる林であり、前代の担当者から引き継いだ栽培地であった。貢納量は七升なので、小規模であったと思われる。一方「大林」は、大澤寺の栗林とあり、貢納量は一斗七升と定められていた。⁽³⁶⁾大澤寺の所在地は『山城名勝志』によれば、「大沢寺在岩屋神社鳥居東二町余」とあり、現在の大宅寺の所在とはほぼ一致する。応仁・文明の乱後、山科家は毎年、盆の墓参を欠かさなかったが、「夕方御影堂之御ハカへ参候也、イホ谷大澤寺へ小僧ツトメ、⁽³⁷⁾、あるいは「八時分如先規御影堂ノ代、御ハカ・御白川院ノ御ハカイホ谷参也」⁽³⁸⁾ともあり、中世には「イホ谷」と呼ばれていた。「イホ」は「庵」と推定されるので、大澤寺（庵）は山科家と後白河上皇の墓のある御影堂の管理をしていたと思われる。そして東庄の寺庵衆もまた此処に集住していたと考える⁽³⁹⁾つまり、大簗（大竹村）は山科家にとっては、御影堂を囲む聖域と認識される栽培地であり、ここから収穫される栗もまた「林殿」同様、由緒あるものであった。

三 その他の栽培地

③ 大簗

この地も、応永期以来の栽培地であり、言国が没する前年の文亀二年まで、七升の栗を納めているが、場所は不明である。

④ 四松殿

この栽培地は『教言卿記』にだけ所見されるが、「四松殿」の名称はやはり御所遺跡の関連する敷地であろう。所在地は「山口」と記され、七升の栗を納めていた。⁽⁴⁰⁾「山口」とは御所山の入山口であり、東岩屋神社脇、現在の大宅山田町辺りと思われる。御所山は山科御所に因む名称であり、山科家にとっては聖域として領民支配に正当性を与えるものであるが、同時に東庄の人々にとっては、柴や草を刈るといった日常生活に欠かせない場でもあった。⁽⁴¹⁾庄民には山手（用益料）⁽⁴²⁾のかに正月四日の「山の口開き」として、餅や麦、銭などが課された。御所山は本来ならば古代豪族の大宅氏を祀る岩屋神社の裏山なので、「大宅山」と呼ばれるべきであるが、それに勝る後白河御所の由緒と権威を創出するための名称に転化したと考えられる。⁽⁴³⁾当地は言国の代には記載がないので、栽培地としては衰退したと思われる。

⑤ 新宮林・⑥ へんついでどの西林（おいちの林）⑦ 貢納量のみの栽培地

⑤⑥の二ヶ所は東岩屋神社の敷地内の林である。

新宮とは十一月に「御はたき」（御火焚）の神事がある社で応永十三（一四〇六）年、吉田社の神主により遷宮の儀式が行われた。⁽⁴⁴⁾更に三年後には「小宇二社」が造営され、奉行を務めた代官大澤重能は長門守に叙されている。⁽⁴⁵⁾応永期に鎮守社が領主の山科家により整えられていることがわかる。貢納量は一斗二斗と時期により調整されている。

「へんついで殿」とは竈神を祀った屋社で、後に「おいち」と呼ばれるのは「一殿」の居場所であったからであろう。一殿とは神坐（いちこす）なわち専属の巫女である。へんついで殿には湯掛け神事や検断の

ための湯起請を行うための竈が設置され、湯屋に相当する施設であったと思われる。このへんつい殿の西の林もまた神社の敷地続きであり、三升の栗が納められている。栗のほかには梅なども納められている。

①・②・④は応永期よりの栽培地であるが、⑤と⑥の史料上の初見は文明十二(一四八〇)年である。いわば後発地である。⑦は貢納者のみなので、自己所有の林の可能性やまた貢納者が岩屋神社の供僧と大澤寺の僧なので、⑤の新宮林か②の大林の可能性もあるが不明である。

四 全体の栽培地域

以上、不十分ながら、栗の栽培地を考察してきた。元より正確な位置を比定することは困難であるが、史料と地名に即して以下のことが確認できる。

(1) 複数の新旧の栽培地は、東庄を通る宇治大道より東側の範囲にあり、御所山の入り口にある東岩屋神社の敷地内やその下に広がる林であった。

(2) 根本の栽培地は「林殿」と「大簗」である。それらは往昔の後白河上皇の上御所跡の林と東岩屋神社前に広がる竹林であり、在地支配の拠点である政所、御影堂及び山科家代々の墓やそれを管理する大澤寺や寺庵衆が点在する地域であった。

(1)・(2)を総合すると、栗の栽培地は全て御所跡の敷地内であったと推定できる。

山科家にとって栗は単に季節の進物品ではなかった。名字地の栗を贈ることこそが重要であり、禁裏を筆頭に公家社会における自己の家

を周知させる有効な手段であった。

その意味では、山科家にとって栗年貢は栽培地ごとに把握すべき重要な収取物であった。東庄からの他の産物が「公事」であったのに対し、栗は、領主側から積極的に設定された「年貢」であったのである。⁽⁴⁸⁾

なお、各栽培地の管理と貢納を担ったのは、御所山の管理を任命された山守衆五人を中心とした在地の有力層「おとな・老」や寺庵であったが、本論は貢納後の山科家の栗の贈答を考察することを目的としているので、ここでは、彼らの存在形態について言及しないことを予め断っておきたい。⁽⁴⁹⁾

第二章 貢納品から贈答品へ

一 応仁・文明の乱の終息と栗年貢

東庄から九月に栽培地ごとの管理者によって納められた一石余の栗は、まず代官大澤氏のもとに集まる。『山科家礼記』の主なる記主は大澤久守である。山科家は寛正三(一四六二)年五月に当主顯言が嫡子のないまま世を去り、庶流の言国がわずか十一才で養子に迎えられている。言国の実父の保宗も翌寛正四年に死去する。言国は山科家の全所領を相続したものの、公家社会に後ろ盾もなく、内蔵頭としても御服調進の知識、経験ともに未熟であった。そしてこのような若き当主を、公私共に支えてきたのは有能な家宰(雑筆)であった大澤久守であった。⁽⁵⁰⁾ そもそも、山科家の栗贈答の詳細を知り得るのは、久守の書き

残した日記によるところが大きく、当該期の在地の動きを具体的に把握しながら本稿を進めてゆく上で、要となる人物である。

年貢の栗の全量およびそれがどのような配分で当主のもとに届けられたのかを確認できるのは、文明十二年以降である。応仁・文明の乱の続く間は、難を逃れて多くの公家が都を離れる状況下、山科家も伝手を頼って坂本の延暦寺執行の屋敷内に居を移し、言国は禁裏小番の宿直の時のみ上洛するという変則的な生活を送った⁽⁵¹⁾。特に断らない限り、以後「乱」或いは「大乱」は応仁・文明の乱を指す。山科七郷も戦鬨に動員されるなどしておそらく栗林の管理もままならず、年貢米と同様、栗年貢も滞っていた⁽⁵²⁾。山科家も、洛中の「構」を廻らした東軍の陣営の内、室町殿(義政)と起居する禁裏(御土御門天皇)へ、栗を正式に進上する機会もなかったと考えられる⁽⁵³⁾。やがて、西軍の主力大名の土岐氏や畠山氏が下国した文明九(一四七七)年九月、京都における乱が終息し、山科家も東庄に再び入部できた⁽⁵⁴⁾。その翌年の文明十年から栗年貢は復活した⁽⁵⁵⁾。しかし、当年は禁裏に進上した記事はないので、まだ充分な態勢が取られていたわけではなかったのであろう。翌十一年には、文明八年に焼亡した室町第から日野富子の母苗子の邸である北小路殿に寓居していた後土御門天皇が、修造された内裏に還御した年である。夏には乱中途絶していた八朔の儀礼も復活して、朝儀の再興の兆しが見え始めた⁽⁵⁶⁾。翌文明十二年には、一七才の勝仁親王の宣下(元服加冠)もとり行われた⁽⁵⁷⁾。

一方幕政においても、文明・応仁の乱が一応終息して、都の流通も再稼働し始めた文明十年以降は、文明五年に九才で父義政から將軍職

を譲り受けた義尚も十五才となり、予定通りに御判始・評定始もあった。実態はともかく、義尚の執政意欲が顕在化する時期でもあった⁽⁵⁸⁾。乱後、公武共に画期を迎えた時期である。

山科家でも、寺社本所としての家政運営の見直しがなされ、東庄からの貢納の品目も詳細に確認され、膝下荘園の支配体制の再スタートが切られたのである。そして、当家にとって東庄の栗は贈答品として禁裏ばかりでなく、広汎な諸相へと流れていくのであり、今まで以上に大きな役目を担っていくことになるのである。

二 栗の貢納と贈答

左の史料一・七は、『山科家礼記』と『言国卿記』の文明十二年と十三年から抜粋したものであるが、幸い文明十三年は東庄の代官である家司大澤久守と当主言国の両者の日記が残っているので、栗年貢とその後の贈答行為の概略を把握することができる。

史料一 『山科家礼記』 文明十二年九月六日条

今日年貢栗納候なり、

大竹むら二斗四升之内一斗五升色々事二残納也 二郎あもん

はやしとの三斗九升五合 今日皆納 三郎兵衛

しんくうはやし 一斗 ひこ七

一斗北殿御分^① ひこ二郎

一斗三升^{くさきうり} はやしあもん 三升へんついと、西林南としより

二斗 せいはん 北殿御分

七升 大ミね せんそう

大竹むろ一斗五升

② 此内三斗五升本所へまいる御年貢也、

③ はやとの同
かきうり五升

一升五合 上様 一升五合うちへ

御ちの人

小大夫殿・少納言殿各下用二一升宛、予わくらへとも一升宛、下女

五合下用二、

④ 三郎ひやうへ・彦七ミやけの栗出之、林ゑもん・セイハン・三位・

禪宗・二郎衛門・ 与二郎・二郎ゑもん、

⑤ かいくり

二百文 彦七 一斗

二百文 林ゑもん 五升栗 六升栗 ⑥ 御かい候、
五升栗 上様へ、百文分

五百文 三郎ひやうへ 五升栗

二百文 三位 同

百文 せいはん

以上一貫二百文、又百文禪宗出之、一貫三百文力也、

史料二 『同』 文明十三年九月廿一日条

⑥ 一、三位・普門栗かこ六、ひけこ二沙汰候也、

史料三 『同』 文明十三年九月廿二日条

一、東庄栗御年貢納候也、

⑦ はやしとの
三斗九升五合 三郎ひやうへ

此内一斗五升本所へまいる

⑧ 大たけむら
二斗二升二升 二郎ゑもん

此内一斗五升本所まいる

一斗三升 いや九郎ゑもん 七升 大ミねせんそう

⑨ 此内五升本所

三升 へんついと西又二郎

⑩ きたとの、分
二斗 せいはん 二斗 きたとの、ふん、

⑪ 此内一斗いけ方也
七郎さへもん しんくはやし

(以下九月は欠損)

史料四 『言国卿記』 文明十三年九月廿二日条

一、如先規栗共ヲサムルト云、御ハツヲ、シヤウクワン也、目

出、

⑫ 一、栗明日先所へ可遣間、文共書畢、

史料五 『言国卿記』 同年九月廿三日条

一、今日彦三郎栗持上也、予方ヨリ栗所、

上薦一盃、太典侍局同、新大典侍局同、長橋局、坊城局同、庭

田・民部卿・藤宰相・同女中一盃也、

一、禁裏大一籠、親王御方小一籠、二宮御方同、伏見殿同進上也、

一、樂共吹畢、三條・日野一籠、勸修寺同栗遣、兵衛尉使ニテ也、

史料六 『同』 同年九月廿五日条

一、武家藤宰相局・同小宰相局へ栗一籠ツ、遣畢、

史料七 『同』 同年九月廿八日条

一、今日栗持竹阿弥坂本寺家遣之、

(傍線筆者)

以上史料一―三は、東庄から栗の年貢が納められるまでを、史料四―七は当主に納められた栗の贈答を具体的に知ることができる。下線部を手掛かりにまとめると以下のようになる。

- 1 栗の総量一石七斗五合の内、本所言国に納められる分は三斗五升である。(下線②)
- 2 三斗五升の内訳は林殿と大竹村各一斗五升と栽培地不明の五升である。(下線③・⑦・⑧・⑨)
- 3 別枠で「北殿御分」三斗がある。(下線①)
- 4 貢納者は土産の栗を提出する。(下線④)
- 5 各栽培地から追加の栗を購入している。(下線⑤)
- 6 贈答用の籠を東庄から調達している。(下線⑥)
- 7 言国は贈答に先立ち送り状を作成する。(下線⑩)
- 8 言国の贈答先は禁裏とその廷臣を中心としている。(史料五・六

・七)

文明十二年、十三年は乱中に滞っていた栗の年貢量が新たに定められ、言国の取り分と贈答先の大枠が決められたのではないかと推察する。本所の取り分はやがて三斗に定着する。⁽⁵⁹⁾栽培地ごとの量が調整され、栗は東庄からの重要な年貢と位置づけられ、以後の当家の贈答資源として確保されたわけである。いわば領主側からの設定量であった。⁽⁶⁰⁾下線①の「北殿」とは前当主故顯言の後家尼であると思われるが、言国と同居している徴証もないので、一種の既得権として別納されたと考えるのが妥当であろう。⁽⁶¹⁾これも延徳三(一四九一)年の段階で二斗とな

り当主言国に一括して五斗納められる。四斗近い栗を追加で購入しているのは、その後の需要を見越してのことであろうが、他の贈答先や使途は文明十二年の段階では不明である。むしろ当該期の栗の流通価格を知る上で、興味深い。⁽⁶²⁾なお言国の贈答先については次章で考察を行う。

季節の産物は旬の時期に贈ることが肝要である。その点、京都近郊の莊園から上ってくる栗は鮮度を損ねることもない、長期間の保存も効いて、広範囲に分配できる。ゆえに、贈答品として優れており、貢納される日を待たずに進物された(史料五)。

当家が年貢の栗をいかに重要とみなしていたかは次の例をもつて知ることができる。史料一から七年後の長享二(一四八七)年、栗も実り始める八月、地下から八朔の貢納品に添えられ、佳例の「栗枝」が当主に届けられる。さらに同じ月の十五日に「白栗」が納められる。⁽⁶³⁾いが栗の枝は予祝的な意味合いを持ち、「白栗」は成熟度と品質を確認するためである。これらには、領主側の期待とともに貢納する在地側へ貢納の義務と進物品に使われる栗であることを周知させる意識も含意されている。この慣行は天文十四(一五四五)年まで確認できる。言国の孫に当る言継の代までも継承されたのである。⁽⁶⁴⁾

このように応永期を初見とする栗年貢も、教言より三代の時を経て、当主言国の代に山科家の主要な贈答資源として再認識されるに至るのである。

三 栗贈答の二重構造

山科家の栗の贈答が史料上はじめて見出せるのは応永十三(一四〇六)年であるが、進上先は後小松天皇と伝奏の日野重光のみで、しかも少量である。⁽⁶⁵⁾当時の当主教言の最晩年の日記である『教言卿記』の開始日は自宅の火事罹災日の五月二日である。従って失われた自己の日記を補うために執筆されたと考えられるので、当家の地方荘園の年貢高や山科東庄についての記事も散見されるが、贈答資源としての栗年貢に対する意識はさほど顕在化していない。むしろ、時の將軍義満(北山殿)の寵臣としての一族の活動が強調されている。その後、長禄元(二四五七)年、顯言の代になると、ある程度の規模の贈答が展開していたことがわかる。⁽⁶⁶⁾しかし、貢納量なども不明であり、この段階で栗贈答の特質を考察するには不十分である。その後、応仁・文明の乱中には栗年貢そのものが停滞し、最小限度の贈答のために栗を地下から調達するという状況であった。⁽⁶⁷⁾やはり、栗贈答の全容がわかるのは、乱後である。前節では史料一七を分析して、①⑧の事項を析出した。これらを踏まえると、山科家の栗年貢の特徴は、当主言国と管理者である家司大澤久守の二元性にあるといえよう。本来は当主の贈答用に設定された東庄の栗年貢を、家司の大澤久守が利用し得たのは、代官職を世襲しながら、東庄の支配体制を堅固に構築してきた大澤家が、彼の代にそのピークを迎えたこととも関係するだろう。東庄の領民にとって実質的支配者はむしろ大澤久守であった。膝下荘園でありながら、間接支配を余儀なくされる新当主の言国。両者には、庶

流出自の当主と嫡流譜代の筆頭家司という、身分差とは別のジレンマがあったのである。⁽⁶⁸⁾

前述したように、貢納総量一石強の内、言国の取り分は「林殿」「大簗」の栗三斗が基本量であった。しかし、由緒ある栽培地の栗こそ、当主の贈答に相応しかった。恒例行事としての栗贈答が一通り済んだ後は、残りの栗は大澤久守の管理下に置かれ、折につけ日常的な進物品として諸方へ配られたが、その手配も彼の管掌するところであった。⁽⁶⁹⁾つまり年貢の栗の裁量権は久守の手にあった。何より注目すべきは、久守自身もまた並行して栗の贈答を行ったことである。文明年間の彼の日記では確認できないが、長享年間になると、その動きが顕在化し、言国の贈答範囲をはるかに上まわる規模の贈答が、同時になされる。⁽⁷⁰⁾楢円の二つの中心のように、当主と家僕が揃って栗の贈答を行うという事態が起こるのである。⁽⁷¹⁾それはまさに「栗贈答の二元性」といってもいい。

次章では、言国、久守両者の贈答の特質を比較しながら、さまざまな場における栗の贈答を具体的に検討したい。

第三章 栗贈答の二元性

一 当主山科言国の栗贈答

言国の栗の贈答行事は、文明・応仁の乱後の文明十年から所見され、彼が没する前年の文亀二年まで続けられた。表2は、史料で確認でき

表2 山科言国の栗の贈答先

年 代	①禁裏	②禁裏女房	③公家	④家族・姻戚	⑤家僕	⑥寺家・その他	出 典
文明10年 (1478)	土御門天皇	御所局・同小宰相局・大典侍局・新典侍局・東御方局・長橋局・新内侍局	広橋・伯民部卿・日野町	藤宰相・同女中			『言国』 9/14・16条
文明13年 (1481)	後土御門天皇・勝仁親王・二宮・伏見殿	上藤局・大典侍局・新大典侍・長橋局・坊城局・武家宰相局・同小宰相局	庭田・伯民部卿・日野・勸修寺・三條	藤宰相・同女中		坂本寺家	『言国』 9/22条
長享2年 (1487)	後土御門天皇・勝仁親王・二宮・伏見殿・安禪寺殿	花山院御局・庭田御局・広橋御局・長橋局・中内侍局	庭田・伯民部卿・日野・勸修寺・三條	言国室・藤宰相・同女中・御方		東山寺家後料人・坂本寺家	『家礼』 9/8条
延徳元年 (1488)	後土御門天皇・勝仁親王・二宮・伏見殿	花山院御局・庭田御局・広橋御局・長橋局・中内侍殿・中山局	花山院・庭田・伯民部卿・日野・勸修寺・三條・四辻	言国室・藤宰相・同女中・御方	中務小輔・坂田資友・三郎右衛門・大夫・少納言女・五位女・御乳人・おち・彦四郎・智阿弥	寺家御局	『家礼』 9/18条
明応2年 (1493)	後土御門天皇・勝仁親王・青蓮院宮・伏見殿	花山院御局・庭田御局・広橋御局・長橋局・中内侍局・新内侍局	花山院・庭田・日野・伯二位・勸修寺・	東向・内蔵頭・阿子・阿茶丸・高倉入道・同女中・同御方	中務小輔・三郎衛門・大夫・御乳・茶千・御力・千代・彦衛門・智阿弥・彦千松・下女2人	寺家御料人	『言国』 9/7・8・9条
明応3年 (1494)	後土御門天皇・勝仁親王・青蓮院宮・伏見殿	花山院御局・庭田御局・広橋御局・長橋局・中内侍局・新内侍局・伊予局	花山院・庭田・日野・伯二位・勸修寺・三条西・甘露寺	東向・内蔵頭・阿子・阿茶丸・茶子・高倉入道・同女中・同御方	御乳・大夫・茶々・中務小輔・彦衛門・千松・智阿弥・竹阿・下女2人・雑色2人	本撰寺・本願寺女中・田向・宗恩(坂田資友)	『言国』 9/27
明応7年 (1498)	後土御門天皇・勝仁親王・青蓮院宮・伏見殿	花山院御局・広橋御局・長橋局・中内侍局・新内侍局・伊予局	花山院・庭田・伯二位	東向・内蔵頭・阿子・阿茶丸・茶子・高倉入道・同女中・同御方・御料・周快	女房衆・男衆・下藤・雑色	本撰寺・中坊	『言国』 10/6・7・8条
文亀元年 (1501)	後柏原天皇・若宮・二宮・不遠院宮(青蓮宮)・伏見殿	長橋局・民部卿典侍局・広橋局・二位殿局	三条西・伯卿・庭田・日野町・勸修寺	東向・内蔵頭・茶子・高倉入道・同女中・御方	兵衛尉重敏・中務少輔・坂田孫四郎・三郎衛門・筑後・加賀・女房2人下藤・雑色	本撰寺・伊勢貞隆・野洲(禁裏御倉)・恵命院・センシウ院・豊筑後・坂本寺家父子	『言国』 10/14～29条
文亀2年 (1502)	後柏原天皇・若宮・二宮・不遠院宮(青蓮宮)・伏見殿	長橋局・民部卿典侍局・広橋局・二位殿局	三条西・伯卿・庭田・日野町・勸修寺・広橋・甘露寺	東向・内蔵頭・茶子・高倉入道・同女中・御方・周快	兵衛尉重敏・中務少輔・坂田孫四郎・三郎衛門・筑後・加賀・女房2人下藤・雑色	斯波義敏・隨藏主・本撰寺・弘願院・野洲・豊原朝秋父子	『言国』 9/21～10/1条

『言国』 = 『言国卿記』 『家礼』 = 『山科家礼記』

る年の贈答先を①禁裏②禁裏女房③公家④家族・親類⑤家僕⑥寺家・その他に分類したもので、当主による恒例の栗贈答の概略がわかる。⁽⁷³⁾

①の禁裏は、当家本来の献上先であるが、後土御門天皇、勝仁親王、二宮親王、そして後土御門天皇の連枝伏見宮(邦高親王)で構成されている。

②と③は内蔵頭である言国が、天皇と親王の衣食を調進する職務上、最も関係の深い、いわば上司や同僚に当たる廷臣・宮中の女房である。庭田雅行・勸修寺教秀は武家伝奏、民部卿は神祇伯白川忠宣、三条公治、日野政資は勝光息で禁裏近臣であると同時に、將軍義尚室の兄、將軍家の姻戚である。彼らは、後述の高倉家とともに、將軍に伺候する家々でもある。⁽⁷³⁾

中世において、上位へ物を進上する際には、申次に同じ物を贈ることが不可欠であった。言国にとって後宮に所属する女房衆との接触は日常事であった。とりわけ、長橋局(勾当内侍)は月次や定例の行事(和歌会・連歌会・楽会など)の調整や諸公家からの奏請を担い、奉書を以て天皇の意志を伝達する上でも、伝奏と同様に重要な役職であるので、他の女官たちに先んじて、禁裏へ進上する日に贈られることもあった。なお、当該期はこれら禁裏女房の中の上臈や大典侍が天皇の実母や正室の身であった。ゆえに、禁裏への進上と禁裏女房衆への贈答とは切り離せなかった。因みに勝仁親王の母は庭田朝子で、近臣庭田雅行の姉であった。

④は言国一家と言国室(東向)の里である高倉家である。高倉家は山科家と同様、禁裏の装束や衣紋を家職とする家であり、当該期は武家

の近臣の側面が大きく、藤宰相(永継)・女中(永継室)・御方(永康)で構成されていた。また言国室(東向)の外、娘に恵まれた永継は武家宰相局や小宰相局、後には新内侍(継子)など、女官を輩出した。また、甘露寺家や園家、あるいは山科野村の本願寺に嫁がせるなど多様な人脈を有していた。⁽⁷⁴⁾言国は、高倉家から妻を迎えたことにより、姻戚関係の幅も一挙に広がり、公家社会での地位も安定するようになったので、妻の里高倉家への贈答は栗に限らず、機会あるごとに欠かさず行っていた。兄弟のいない言国にとって、家職を同じくする最も恃むべき身内であった。

⑤の言国の家族や青侍を筆頭とした家僕への配分は、文明年間は大澤久守が管理していたと思われるが、延徳元年には、言国自身が当主として配分するようになる。定量取り分は変わらず、前述した「北殿分二斗」や「買栗一貫文」で、栗の量を補給している。⁽⁷⁵⁾家僕への配分権が移行するということは当主の権限が拡張されることではあるが、言国の取り分は、大澤久守が没するまで、定量三斗のままであった。久守は明応七(一四九八)年十一月に没するが、その直後、言国は東庄の直務宣言をする。そこに至る背景には、栗年貢の裁量権の問題も少なからず関係していると考ええる。以後「林殿」「大竹村」ばかりでなく、すべての栽培地から上がってくる栗は、言国自身が管理するようになる。

⑥は東坂本にある寺家(延暦寺執行)の一家であり、山科家の乱中の寓居先であり、山科家にとって物心両面で恩顧のある家族であった。⁽⁷⁶⁾また、明応三(一四九四)年以降、本撰寺が加わるが、これは同年、強

盗から受けた傷がもとで落命した嫡男定言の回向寺である。⁽⁷⁷⁾ 定言が内蔵頭として順調に出仕していた矢先の不幸であったが、九月には、例年通り、栗の贈答行事は行われている。⁽⁷⁸⁾ 山科家にとって、恒例行事を催行することは重要であり、贈られる家にとっても、当家を「栗贈答の家」と期待していたのである。

次に栗の量と形態であるが、量については、禁裏を筆頭に三升、二升、一升五合、一升と段階的に序列が付けられた。贈答量を桁で軽量できる簡便さも栗の特長である。さらに、禁裏および上位の公家には奉書が付され、籠が地下より用意された(史料二・四)。例えば、延徳元年の場合、三升用籠二、二升用籠四、一升五合用籠七と十三個の籠を調達している。当然、籠が到着しないと進上はできなかった。⁽⁷⁹⁾ また、盆や硯の蓋も常用された。これは、手持ちの容器により、贈り先への礼儀を調整できると共に、返却される時に相手より返報の品が添えられるという利点もあった。⁽⁸⁰⁾ 中世には、このような食品のやり取りが頻繁に見られ、贈与行為が、互酬性という概念において、一種の交換に転化し、貨幣流通とは別次元の物流現象を促したのである。この慣行は現代社会にまで受け継がれているものである。⁽⁸¹⁾

以上、言国の栗の贈答は歴代の慣行を受け継いで、禁裏とその近臣たち及び宮中の女官たちを、主な進上先とした。この恒例の贈答は、『お湯殿の上の日記』において確認する事ができる。文明九年から始まるこの記録は言国の生きた時代を概ねカバーできるのであるが、毎年、所見されるわけではない。栗年貢が再開した文明十(一四七八)年九月の記述はなく、表2のうち確認できる年は明応三(一四九四)年、

明応七(二四九八)年、明応八(二五〇〇)年だけである。また「山しなより御くりのかこまいる」といった簡単な記述は、女官による業務日誌という史料の性格を反映している。しかし逆に山科家の記録が欠けている文明十七(二四八五年)、明応六(一四九七年)や同八年、二代先の言繼の大永七(二五二七年)、享禄二(二五二九年)にも所見されるので、栗贈答が言綱・言繼と次々世代にまで、「家の贈答」として継続されていたことがわかる。⁽⁸²⁾

二 家司大澤久守の栗贈答

ここでは、山科家家司の大澤久守が当主言国と並行しておこなった栗の贈答に関して考察を行う。

大澤氏は、代々山科家の雑掌を勤め、少なくとも久守の祖父重能の頃より長門守に叙され、当家の筆頭家司として、また山科東庄の代官としてその地位を築いてきた。重能、重康と続いて久守も応仁(一四六八)年に長門守の官途を拝し、応仁・文明の乱の終結後、東庄の代官職を含めた諸知行権・給分を言国より再安堵されている。⁽⁸³⁾ 尊卑分脈によると、重能の前代の重基より「大澤」を号しているが、菅原正子氏は、新出の『田中穰氏旧藏典籍古文書』により、重基より三代前の重道(道禪)が、山科家の雑掌であったことを明らかにした。⁽⁸⁴⁾ 『山科家礼記』の記主は複数の当家雑掌であるが、家僕の日記が当主の日記に混じり伝存するのは稀であり、当該期の在地動向や社会情勢を知る貴重な手掛かりを提供している。特に主なる記主大澤久守による豊富な内容は、本人の資質によるところも大きい。彼が、山科家

が嫡子不在という危機に直面した時期以前より在職していた事とも深く関連する。寛正三(一四六六)年に庶流から迎えた継嗣言国の後見者として、山科家の家職(装束・筥)にかかわる故実や知識を習熟させる役目を担わざるを得なかったのである。彼の日記には、代官として掌管する山科東庄の住民との公私にわたる交流が頻出するが、応仁・文明の乱中に山科七郷民を率いて参戦すると同時に、御厨子所目代としても、商いに従事する山科郷民を統括するなど、名実ともに膝下莊園に対する支配権を確立していた。特に乱後の文明十二年以降、栗年貢の詳細な記録と共に、贈答先に関する記事も、当主言国のそれをはるかに上回る量となる。

特に、長享二(一四八七)年、延徳三(一四九二)年、明応元(一四九二)年の栗贈答は「大澤久守の恒例行事」といっても過言ではない規模で展開される。「予遣候所、栗事」に続いて、久守自身の贈答先である百人に上る人々の名が記される。公家の一雑掌がする贈答としては異例とも言える。

次に贈答先に関する二つの資料を提示する。

【資料1】は長享二年、【資料2】は延徳三年の久守の贈答先を『山科家礼記』から抜き出し身分ごとに分類したものである。家人はもとより奉行人、他家の青侍、楽人、酒屋、雑魚売など身分の上下を問はない贈答先は久守の人脈の多様さを示すと同時に、そこには中世社会の人々の贈答によるネットワーク形成の一端が垣間見える。当主の家族にも贈るのは、栗の裁量権が代官職に付帯する権利との認識であろう。なお両資料にある寺家の南洞院(房実)は『尊卑分脈』によれば、

山科家の遠縁にあたり、三井寺僧侶であり当家の仏事にも携わっている。しかし言国からの贈答範囲ではないのである。

【資料1】長享二年の贈答先(『山科家礼記』同年九月六日条より。数字

は栗の量、単位は升、傍線と*は筆者。【資料2】も同じ)

禁裏

後土御門天皇3(籠)・勝仁親王1.5(籠)・二宮1.5(籠)・伏見殿1.5(籠)・安禅寺殿1(籠)・長橋局1.5・花山院局1・庭田殿御局1・広橋殿御局1・中内侍殿1.5

公家

*日野政資1.5(籠)・庭田雅行3・*伯忠富王3・勸修寺殿3・*三條殿2・(籠)薄殿1・甘露寺親長1・同元長1・中御門宣胤1・*町守光1・宮内卿1.5・豊原筑後守1.5・豊原近江守1・*高倉殿3・同女中1.5・*同御方1.1

青侍

(伯内)櫻井方・(甘露寺内)佐渡守1・本庄三郎右衛門1・(中御門内)神山1

武家

三位入道殿3(籠)・*結城近江介3(籠)・*同二郎九郎1.5・*細川摂津守1.5・*同内鎌田1・伊勢右京亮3(籠)・*秋庭伊代守1.5・*越後守1.5・松田對馬守3(籠)・飯尾大和守3・*同加賀守1.5(盆)・*同肥前守入道1.5・*同豊前守1・*同四郎2・*同筑前守0.8・*同左衛門大夫3(籠)・*同大藏大夫2・*同二郎左衛門1・*同被官渡辺1・*同浅見1

寺家

*東山殿寺家御料人2(籠)・坂本執行3.5・同女中2.5・南洞院(房実)1・本誓寺1.5・(勸修寺)西林院1.5・大本庵1.5・宗鏡1.5・善長寺1.5・中坊1・へう庵1

家人

本所1・上様1.5・御方(定言)1・同御乳人1・ひめ御料人1

・小御料人1・若御料人1・大夫殿1・五位1・御乳1・
中書(高階頼久)1・掃部助1・兵衛尉(大澤重致)1・坂田資友
1・式部女1・少納言女1・智阿弥1・同母1・彦四郎1
・彦三郎1・与三郎1・千松・おちよ0.5・おこ1・つるい
し1・あま1・ひこ1・竹阿弥1・同女1・入道1・彦右
衛門1

その他
雑魚売1.5・紺屋1.5・酒屋1.5・東山酒屋1.5・存阿弥1・彦二郎
入道2・山中与三入道1.5・やまと1・かゝ1・へんの殿2・
難波殿1.3

【資料2】 延徳三年の贈答先 (『山科家礼記』 同年九月廿二日条より)

公家 薄殿1・甘露寺殿1・豊原近江守1・豊原佐渡守・同御方

青侍 中御門内神山1

武家 武衛三位殿2・同下殿2.2・同又二郎殿1・同御北向2・同内

北村1・同水巻・秋庭方・*飯尾筑前守1・*飯尾加賀守2

・*同中大夫3.5・*四郎1・*同内奥村1・*飯尾大和守1.5

・同肥前入道1.5・*同左衛門大夫1.5・*同右衛門大夫1・*

同内浅見1・*飯尾大藏大夫1・同彦右衛門1・庄藤右衛門

2・泉原女1.5・宇野孫六2

寺家 *金光院2.5・坂本寺家3・三位へうほう1・智恵子1・南洞

院1

家人 大夫殿・中書・筑前・美濃(大澤重有)・五こ・衛門・同女・
およめ・あこゝ・彦二郎(久守孫)・智阿弥・竹阿・ひこ(雑

色)・御乳人・千松・松若・つるいし・おこ・左近1・同女
1・難波殿母1・彦四郎母・大入道・小入道・うは以上1
・鯉江方(久守女の婚家先か)2.5

その他 存阿弥1・下のくきの木1・上の酒屋1・下の酒屋1・春阿
1・宇治2(妙音庵)・与三郎1・同女1・紺屋1・林1・小
林1・同いもうと1・宇野孫六2

ここで確認すべきは、長享二年、延徳三年とも、時の將軍、室町殿
が近江に出陣、長期滞在していることである。これは、東山殿義政の
基本政策である寺社本所領保護を受け継いで、隣国近江の守護六角高
頼の押領、違乱を征伐するためであった。義政の嫡子義尚は長享元年
九月以来、鉤の安養寺に布陣して一年である。⁽⁸⁵⁾そして、長享三年に陣
中に没した義尚の後を受けて嗣立された今出川殿義視の嫡子義材も、
將軍宣下の翌年の延徳三年に義尚と同じ理由で三井寺に布陣している
のである。⁽⁸⁶⁾幕府の中樞機能が將軍もろとも近江に動座する当該期の特
殊な政治形態は、新將軍がその権力を誇示する為のものであり、事実
上の代始、単独の執政開始と捉えることができる。⁽⁸⁷⁾それゆえ、久守の
贈答範囲にも、当該期の政治状況に対応する意図が折り込まれている
と考える。それでは、兩年の資料をもとにして大澤久守の贈答先につ
いて検討する。

(1) 近江陣中への栗贈答

【資料1】

長享二年九月の栗年貢は、小粒という理由で一端返却された。久守
は翌日再納された栗に「上、上中、中」と等級を付けている。厳密に

粒を揃えてまで臨んだ贈り先はどこか。おそらく、前年九月、近江鉤へ出陣した將軍義尚に従い、鉤の陣に布陣している武家と公家であつたと見る。資料中の＊は、『長享元年常德院殿様江州御動座當時在陣衆着到』の中に見える在陣武家並びに公家諸衆である。「法中」には、東山殿御料人つまり義尚の連枝で、兄と共に陣中にあつた三宝院義覺もいた。護持僧として随陣したのである。

義尚政権の構成員については、設楽薫氏の專論に詳しい。⁽⁸⁹⁾それによると、五番編成からなる直轄軍団の奉公衆と、將軍直属の諮問機関を構成する御前沙汰衆あるいは右筆方と呼ばれる法曹出身の奉行人であつた。⁽⁹¹⁾特に、応仁・文明の乱が勃発して以後、管領の機能が低下するに伴い発給されなくなった管領奉書に代わつて、幕府の基幹文書となつたのは奉行人奉書であつた。そこに加判する奉行人の集団は、寺社本所が幕府に所領還付を申請するための太いパイプであつた。贈答先の武家の大半を占める奉行人飯尾一門は、飯尾氏が山科家の訴訟(伺事)の窓口である別奉行を代々担当してきたという関係に加えて、大澤久守との日常的な交流が深かつたことによるものである。実際に飯尾加賀守(清房)と松田丹後守秀長は「御陣奉行」を勤める主力奉行人であつた。⁽⁹²⁾しかし、義尚の与党は、奉行人と対立する奉公衆であり、その中でも結城政広・二階堂政行・大館尚氏は、「近江評定衆」を構成し、義尚側近として御前沙汰(將軍の政務決裁)に深く関与していた。特に結城政広・尚隆兄弟は側近中の側近で、弟尚隆は敗走した六角高頼を廃して近江守護に任じられ、權勢を振るつていた。⁽⁹³⁾

このような状況下、山科家にとって、武家の贈答先の上位に下線③

の、義尚の執政を牛耳る結城近江介七郎(尚隆)・同二郎九郎(子か)を置いたのは止むを得ない。続いて、管領の細川摂津頭(政元)、日野殿(政資)・三条殿(正親町三条公治)・伯殿(白川忠宣)・高倉殿(永継)・御方(永康)父子らが在陣公家にも丁重に贈る。在京の勸修寺教秀も含めて、彼らは將軍家昵近公家であつた。特に日野政資は日野富子の甥にして義尚室の兄であり、義尚を後見する立場と言えた。久守は公武の差なく最大の三升を贈っている。

一方、久守は京にある義政(東山殿)のもとに止まつた奉行人の飯尾大和守(元連)や松田對馬守(数秀)、伊勢右京亮(貞遠)にも、在陣衆と同量の栗を贈っている。飯尾大和守は奉行人の頭である公人奉行、松田對馬守数秀も有力奉行、伊勢右京亮は義政の御供衆であつた。政所執事伊勢貞宗もまた京に残つた。

義尚の近江出陣の真の目的は、自己の支持基盤である奉公衆の擁護(所領回復)と義政の支持基盤である奉行人を京から切り離し、自己の権力下に置くことであつた。しかし、寵臣結城兄弟の専横振りは、管領細川政元との対立ばかりか、奉公衆の間にすら不満を募らせていた。⁽⁹⁴⁾將軍の近江出陣を好機として、所領の回復を図りたい山科家ではあつたが、義尚与党の奉公衆の存在、奉行人頭首を京に留めた義政の隠然とした力、結城兄弟と対立する管領細川政元、政所執事伊勢氏の動向といった複雑な情勢を視野において、どの勢力に対しても粗密なきよう、同量の栗を贈つたことは、家宰大澤久守の高次の政治的判断であつた。

公武あわせて近江に在陣するという特殊な状況下、久守は武家、公

家、寺家、どの階層にも接点のある雑掌という立場にあったからこそ、言国の立場を代行できたのである。山科家の由緒を象徴してきた栗は、武家政治の場で活用される存在となった。換言すれば、栗の贈答先から、義尚政権の人脈及び父義政との関係が見えてくる。⁽⁹⁵⁾年貢量は一石三斗三升五合。贈答に消費した栗は一石三斗九升一合。貢納量を上回る栗を一挙に消費したことになる。手元には買栗と土産の栗が残るばかりであつたと推定する。翌年三月、義尚は陣中に病没する。⁽⁹⁶⁾

【資料2】

長享三(一四八八)年三月、二十五歳で近江陣中に没した義尚の後に嗣立された足利義材の権力基盤もまた、限定された近習によつてのみ構成されていた。⁽⁹⁷⁾義材の父義視(義政の弟、今出川殿)は、かつて応仁・文明の乱に際しては西軍の盟主となり、乱後は土岐氏の領国美濃に在国していた。故に管領細川政元や文正の政変以来、不和の関係にある政所執事伊勢貞宗も義材の嗣立そのものに対して不満を抱いていた。⁽⁹⁸⁾結局、義視親子は上洛したものの幕府内に信頼できる協力者もおらず、

前代以来の直臣団との間の親密も欠いた。このような状況下、義材の政務決裁を支える側近は、本来の幕臣ではない大乱以前からの近習である種村および同族の一色一門と西軍に与した過去を共有する葉室教忠・光忠父子のみであつた。特に公家葉室光忠の過度の重用は、後の細川政元と富子の諮った將軍廃位へとつながる。延徳三年一月、義材は後見の父義視も亡くしてか、自己の基盤強化を焦る余り、義尚の前例に倣い、六角氏征伐を錦の御旗に掲げ、近江動座を決行する。將軍権力の誇示、側近の厚遇という点では義尚を踏襲している。延徳三年

八月二十七日、義材は三井寺光浄院に動座する。前回と同じ条件を整え將軍の威勢を誇示することが目的であつた。加持祈禱を担う為に妙法院が随陣する。彼は光忠の叔父である。⁽¹⁰⁰⁾

延徳三年の栗贈答はこのような状況下でなされたが、【資料2】にはさほど反映されていない。言国の贈答先の記載もなく、久守が前回同様、山科家の担当奉行人である飯尾一門に贈つてはいるが、在陣衆にさほどの改変もない。これは、栗貢納日直前の九月五日に、当主言国が御陣への参賀を済ませていること、禁裏は勿論のこと、公家の贈答先、特に在陣公家への配慮も長享三年と同様だったからであろう。將軍が替わっただけで、贈答先の内容は義尚の時と同じなのである。

義材の寵臣である葉室光忠も、固定された將軍昵近公家の家格に割り込む事は容易でなかったと思われる。しかし、葉室光忠は山科家にとつては、やはり無視できる存在ではなかった。下線⑦の金光院に二升五合の栗籠を贈つたことに注目すると、今回もまた政治の場で栗が活用されたことが判明する。

金光院は葉室光忠の舍弟である。⁽¹⁰¹⁾この人物は「葉室律」つまり西大寺末寺葉室浄住寺の住持であるが、三井寺の兄の陣所と京を往還している。いずれにしても、義材政権が葉室一族に圍繞されていることが判明する。⁽¹⁰²⁾久守は、栗が納められた九月二十二日に金光院に二升五合もの栗を贈り、二十五日に折紙百疋を携えて、家領備中国水田郷代官補任に關して、兄光忠への取次ぎを依頼する。事の発端は義材が寺社本所保護政策に則つて、義尚同様、近江動座を宣言した同年四月、代始めの氣運の中、山科家も不知行処々を見直したことにあつた。そ

の結果、代官無沙汰による年貢未進が続く地方荘園の一つである水田郷を直務経営として、阿部又七なる人物を請切代官に補任した。⁽¹⁰⁸⁾言国は、義材の動座治定を賀し、葉室宅へも参賀し、⁽¹⁰⁹⁾義材の出陣前の筈始儀の調整も行う。⁽¹¹⁰⁾また葉室が禁裏へ参内する際の申次も勤め、且つ山科郷から動座人夫も七十人出した。⁽¹¹¹⁾ところが、更迭された前代官の聯輝軒が異を唱え、葉室光忠に働きかけ、補任を阻止する動きに出たのである。⁽¹¹²⁾阿部又七は花山院家の家僕だったので、当家も巻き込んで事態はこじれていった。結局、十月に数度、久守が陣所の金光院を訪ね、水田郷の正文を見せ、ようやく聯輝軒の申沙汰を止めさせる確約を得るに至る。⁽¹¹³⁾この一連の過程においては、葉室へも栗一籠、柿一籠を届け、折紙代をさらに二百疋納める。金光院の仲介で水田郷直務の事は落着する。最終的に久守は葉室の陣中に熟柿六十八個を進上している。⁽¹¹⁴⁾おそらく地下から調達したものであろう。同じ公家の山科家も、当該期の葉室光忠に直訴するには、更なる申次、つまり身内の仲介なくしては事が運ばなかったのである。その交渉の場に膝下荘園所産の栗や柿は有効活用されたのであった。季節の嗜好品は日々不如意な陣中にあって、時宜に叶う嗜好品だったのである。翌延徳四年四月にも二度、久守は、陣中の葉室光忠や金光院に栗を贈るなどの配慮をする。しかし、同年九月(明応元年)の久守の栗の贈答先に、両者はない。代わりに光忠の申次を担ったと思われる松殿忠顕に一升五合の栗を贈っている。⁽¹¹⁵⁾

明応二年に義材は再び河内出陣を強行するが、細川政元を中心としたクーデターにより廃位され、堀越公方息の義澄が新たに嗣立される。⁽¹¹⁶⁾

いわゆる明応の政変である。⁽¹¹⁷⁾以後將軍権力は義材・義澄に二分され、細川政元専制の政治的画期を迎える。父教忠、金光院、妙法院以下葉室一族は悉く没落し、⁽¹¹⁸⁾随陣の葉室光忠は不幸にも落命する。⁽¹¹⁹⁾

(2) 斯波義敏への栗贈答

【資料1】・【資料2】より

近江陣中の武家・公家に対する栗の贈答が、山科家の利益に資する公的なものとするならば、同じ武家でも下線②・⑥の三位入道殿こと斯波義敏への贈答は、全く私的なものであり、当該期の久守の文化人としての一面を読み取ることができる。

斯波義敏は、越前・遠江・尾張三国の守護であり、管領三家の名門であったが、畠山家と並んで、義廉との家督争いが応仁・文明の乱の原因の一つともなった人物である。⁽¹²⁰⁾乱中は東軍に属したが、家督係争に乗じた内訌により、本貫地の越前国の実権を守護代朝倉氏に奪われ弱体化を余儀なくされた。乱後は尾張より上洛し、文化的活動に力を注いでいた。長享二年、嫡子義寛が遠江より上り、近江に参陣していた。義敏は文明十六年に従三位に叙せられたので、『山科家礼記』には、専ら「三位入道」や「勘解由小路入道」として登場する。永享二(二四三〇)年生れの、大澤久守より五才年下、ほぼ同世代の人物である。

斯波義敏と大澤久守の交流は、文明十八(一四八六)年より所見される、⁽¹²¹⁾接点は当時流行していた立花であった。おそらく文明十七年、東山殿義政に従って出家し、家督を嫡子義寛に譲った頃よりの接触であったと見る。⁽¹²²⁾

久守は立花の名手として乱中から、避難先の坂本で見聞を広め、寓居先の寺家一家に免状を出すほどの技量であった。言国も文明六年ころより、禁裏御所の持仏堂において度々花を立てているが、その技術も坂本時代に久守から教えられたものであろう。山科家と立花に関する論考は、小森崇弘氏の専論があるが、氏の論ずるところ、本来は供花である立花が、大乱後の朝儀再興において、月次御楽会や御連歌会の莊嚴と結びつきながら、会所的な空間に定着し、禁裏の新しい文化事象となった⁽¹⁹⁾。久守は当時勃興してきた立花を当主言国に指南しながら、自身も様々な場で造詣を深めてきたのである⁽²⁰⁾。

やがて、長享年間に入ると久守はその手腕を買われ、活躍の場を禁裏の黒戸御所や学問所へと広げて行く。そのような中、政治の場を離れたとは言え、かつての守護大名斯波義敏との出会いはまさに千載一遇のチャンスであり、立花を介しての交流は、久守個人の一生を通じて、もっとも充実し、また誇れる時期でもあったと思われる。

そのことは【資料1】【資料2】に端的に表れている。

まず、下線①と下線④の薄以量、下線⑤の甘露寺元長は、久守が禁裏からの要請で立花に参仕する際の申次となった近臣である⁽²¹⁾。長享二年は、前述したように栗の粒が小さく納め直されたが、義敏への贈答は禁裏よりも早く一番になされている。つまり、最も上質の栗を選んだのである。加えて、大津銘柄の酒樽と、鰯や鰯斗鮑といった美物を添えている⁽²²⁾。久守にとって義敏はもっとも厚遇すべき人脈であり、立花という文化を共有する知音であった。少なくとも久守の意識はそうであった。久守は頻繁に斯波邸を訪問する傍ら、花材の草花や枝(心

を贈り合うようになり、花伝書を借りるほど親密になってゆく⁽²³⁾。長享三年に入ると、義敏と同所の息二人とも交流を深め、斯波家に頻繁に開催される花会にも必ず召され、何瓶もの花を立てるようになる。義敏の被官人たちもまた久守から立花の影響を受ける。延徳三年になると、久守の日記には、禁裏の贈答先すら記されず、【資料2】の下線⑥にあるように、久守個人の贈答先の巻頭に武衛一家の名が登場する。

義敏は勿論のこと、下殿、又二郎(共に息に加えて、義敏母であらうか「御北向」にはそれぞれ籠と足付け台を以って進上している。また義敏家臣の水巻入道や弟子分状を授けた同北村二郎右衛門にまで配慮している。武衛家全体を視野に入れた栗贈答は、言国にとっての禁裏に相当する位置付けである。延徳三年は、斯波家だけでも一斗近い栗を贈っており、買栗三斗を補給して臨んだ山科家の恒例行事は、まさに「大澤久守の栗贈答」といつてもいいであらう⁽²⁴⁾。義敏は当主言国にも敬意を払いながら、大澤久守との交流を深めていく。『山科家礼記』は明応元年までの伝存であるが、これは久守が明応二(一四九三)年に世務を嫡男の重致に移譲⁽²⁵⁾し、翌明応三年東林院(故顯言)三十三年忌には出家を遂げ、現役を退いたこととも関係があるだろう⁽²⁶⁾。しかし栗の裁量権は依然保持していた。義敏への栗贈答は久守が没する明応七年まで継続されたと考えるが、健康状態の不良により立花の活動もままならぬ身となった久守と義敏の交流も次第に規模が縮小していったと考えるのが自然であらう。実際、明応四年は禁裏の立花は専ら言国の仕事となっていた⁽²⁷⁾。明応三年の先代三十三年忌直後の家督定言の死も家僕として痛恨の極みであったことだろう⁽²⁸⁾。かつて、気脈を通じ合っ

た両者であつたが、久守の引退により身分的な壁もできたのかも知れない。明応七年の久守死去の七日後、言国は「武衛三位入道ヨリ長門訪二使在之」と書き留めている。⁽¹³⁰⁾言国は没する前年の文亀二年秋に、武衛に栗一盆贈っているが、家督義寛か義敏入道かは判然としない。⁽¹³¹⁾いずれにせよ、山科家と斯波家は久守亡き後も、言国の代が終るまで交流があつたと言える。

まとめにかえて

以上本論は前半において、山科家の歴代当主によつて受け継がれてきた恒例の栗の贈答を、当家成立の経緯と関連付けながら論じた。そして複数の栽培地を分析することによつて、栗の調達先が山科家の名字の地山科東庄に設定されたことだけに止まらず、栽培地そのものが、家格の源泉である後白河院が営んだ御所跡ゆかりの地であつたこと、それ故、その栗を禁裏へ進上することは、内蔵頭を家職とする当家の由緒を示す行為であることを指摘した。少なくとも栗年貢はこのような理由によつて領主側から恣意的に設定されたことは明確である。山科東庄の特産品が栗であつたのではなく、名字地の由緒を冠する産物に栗が選ばれたのである。このことは御厨子所別当として供御人を統括する立場の山科家に毎年貢納される丹波の栗が、禁裏への贈答品にならなかつた点からもよくわかる。⁽¹³²⁾丹波産の栗は現在に至るまで特産品として名高いにも拘わらずである。

また後半では、豊富な記録の残る当主言国の時代に焦点を当て、応

仁・文明の乱以後、室町幕府を筆頭に贈与行為が公私あらゆる場に社会システムとして敷衍する状況の中、顕在化してくる当家の栗の贈答の事例を具体的に考察した。⁽¹³³⁾そこからは本来的な当主言国の贈答範囲と並行して、家宰大澤久守の大規模な贈答行為が析出された。前者は、当主の家格・家職に伴う禁裏を頂点とする上位への贈答であつたのに対し、後者は当主家族、家僕家族、他家の青侍、幕府奉行人、武家被官人、土倉、商人、立花の知己など身分の上下を問わない、いわば久守を中心として伸びる放射状世界を形成していた。これには、幼少にして庶流より継続して、後見とてない言国と、譜代より筆頭家司として仕え、栗の調達先である膝下莊園を、代官として知行してきた大澤家の力関係も作用していた。久守は年貢の栗の裁量権を保持していたからこそ、自己の贈答先を自由に設定することができたのである。時には、当主の判断を上回り、現下の政権を見据えた贈答を、時には個人的に厚遇すべき人脈へと、栗は動いていた。見方を変えれば、貢納された栗を、当主と家司が二元的に、即日の内に消費する贈答行事だつたからこそ、当該期の山科家は「栗の家」として周知されていたのである。残つた栗も来期の収穫まで、大切な贈答資源として有効利用された。節季の産物として、また季節外には重宝な嗜好品たる栗を大量に確保できる山科家だつたことに加えて、栗の贈答全体を計算、差配できる有能な家司大澤久守がいたからこそできた贈答行為であつた。

しかしそれは当主言国にとつて名字の地の膝下莊園でありながら、間接支配を余儀なくされる桎梏でもあつたはずである。明応七(一四

九八年十一月に久守が死去すると、ほどなく言国は東庄の直務宣言をする。大澤家は久守の孫重敏の代に、これまでの知行権のある代官から単に雑掌の立場に戻る。年貢の栗の全量は領主である言国の管理とするところなる。毎年の贈答範囲も本来の禁裏中心の公家社会に戻り、山科家当主の贈答行事の一元化が図られる。年貢米や、他の公事物も当主の掌握するところとなるが、当然のことながら実質的かつ濃密な関係を保っていた代官を失った在地の士気も緩んでくる。以前は同日に納められていた栗も遅延や納量の減少が目立ってくる。言国自身も、栽培地ごとの把握もせず、政所との関係も潤滑を欠くようになる。⁽¹³⁾ 当主としては栗年貢の確保と恒例の贈答の履行だけが関心事であった。栗年貢そのものは次々世代の言継まで継続するが、日記の記事もまばらになり、栗年貢の規模そのものが縮小していたことが確認できる。東庄の栽培地も衰退の途上にあつたものと考えられる。⁽¹⁴⁾

そしてついに、天文十七(一五四八)年の戦国期に、傀儡化した將軍義晴親子と内訌の絶えない細川京兆家晴元および台頭してきた被官三好長慶の三者が拮抗する、時の室町幕府により山科七郷は御料所として没収され、三代御起請符地として四世紀にわたって続いた名字の地山科東庄も、山科家の手を離れる憂き目となる。⁽¹⁵⁾ 当然のことながら当庄よりの一切の収取物もなくなる。ここに山科家の栗の贈答行事は終焉を迎える。元来、領主が贈答品として設定した栗年貢は、在地の産物として特産品に発展することもなかった。むしろ近世に入り、山科は柿の産地として洛中に名を馳せるようになる。⁽¹⁶⁾ 柿は言国の代から八朔貢納に在地側が選択した品目である。贈答と贈答資源の関係は必

ずしも特産品の形成には至らなかったのである。⁽¹³⁾

しかし、山科家のアイデンティティーの全てが失われたわけではなかった。内蔵頭の職務として正月に禁裏に納める三毬打は、近世に入り、禁裏御料所となった山科大宅郷の竹が使用された。竹もまた山科郷の特産品であった。近世に入っても、三毬打は京都所司代を介して山科家より献上されていたのである。⁽¹⁸⁾ そして山科郷の禁裏帰属意識も、当家の支配を背景とした中世を経て、近世に固定化するのである。栗貢納を担った東庄の有力住民も、郷士となって再び歴史の舞台に登場する。⁽¹⁹⁾

今回は、栗の贈答に焦点を絞ったので、山科家が上がってくる他所領の土産品や到来品を利用した贈答行為にまで言及することができなかった。別の機会を期したい。

注

(1) 『日本の社会史 第四巻 贈与と負担』(岩波書店、一九八六年)

一九八〇年代の社会史の盛行により、日本中世史は文化人類学の知見を取り入れて収取体系においてさまざまな賦課を負担する人民の意識にまで踏み込みで贈与或いは互酬的行為との関連で考察する事の必要性を提言した。

盛本昌弘『中世の負担と贈与』(校倉書房、一九九七年)

桜井英治『日本中世の贈与について』(『思想』八八七号、岩波書店、一九九八年)

下川雅弘『贈与論と日本中世史研究』(『史叢』七七、二〇〇七年)

なお、日本中世社会の贈与に関する論考は本論に沿いながら個別に提示するが、その他は、拙稿「中世後期の柿の流通活動と生産活動—山科東庄との関連において—」(京都橘女子大学大学院研究論集三、二〇〇五年)の注(6)を参照されたい。

(2) 羽下徳彦「中世後期武家の贈答おぼえがき」(『中世日本の政治と史料』吉川弘文館、一九八四年)

二木謙一「室町幕府の年中行事」(『中世武家儀礼の研究』第一篇、吉川弘文館、一九八五年)

(3) 春田直紀「中世後期における生鮮海産物の供給」(『小浜市史紀要』六輯、一九八七年)、『看聞御記』のなかの美物贈与(森正人編集発行『伏見宮文化圏の研究』、二〇〇〇「モノからみた一五世紀の社会」『日本史研究』五四六、二〇〇八年)

(4) 盛本昌弘「贈答と宴会の中世」(吉川弘文館、二〇〇八年)

(5) 注(1)盛本昌弘前掲書

(6) ①豊田武・飯倉晴武校訂『教言卿記』一〇三、同『山科家礼記』一〇五、同『言国卿記』一〇八、同『言継卿記』一〇六以上「史料纂集」、続群書類従完成会

②東京大学史料編纂所編『言経卿記』一〇十四、同『言緒卿記』上下以上「大日本古記録」、岩波書店

③国立公文書館内閣文庫所蔵『山科家古文書』一〇四、三軸

④宮内庁書陵部所蔵『山科家古文書』

⑤国立歴史民俗博物館所蔵『田中稜氏旧蔵典籍古文書』所収山科家旧蔵文書など。

(7) 山科家及び山科七郷に関する論考も相当数に上るので、本論の関連書を個別に提示するが、その他は注(1)同様、拙稿の注(8)を参照されたい。

(8) 田端泰子『中世領主制と村落構造』(法政大学出版局、一九八六年)菅原正子Ⅰ『中世公家の経済と文化』(吉川弘文館、一九九八年)

Ⅱ『中世の武家と公家の「家」』(吉川弘文館、二〇〇七年)志賀節子Ⅰ「山科七郷と徳政一揆」(『日本史研究』一九六、一九七八年)

Ⅱ「中世後期庄園村落と検断―村落「自治」の再検討」(『歴史学研究』五六九、一九八七年)

Ⅲ「戦国初期京郊山科東庄における領主と村―政所・五十嵐方・好子屋」(『日本史研究』五〇四、二〇〇四年)

(9) 拙稿「中世後期の柿の流通と生産活動―山科東庄との関連において―」(『京都橘女子学大学院研究論集』三、二〇〇五年)

(10) 注(8)菅原正子前掲書Ⅱ

(11) 国立民俗歴史博物館所蔵『田中稜氏旧蔵典籍古文書』所収山科家旧蔵文書。

なお、両氏の論考中の全史料は各写真帳の複写にて該当箇所を確認した。

(12) 白井信義「治世の交替と廷臣所領の転変・山科家の係争」(『日本歴史』二五三、一九六九年)と注(8)菅原正子前掲書Ⅰ・Ⅱ

(13) 『尊卑分脈』(改訂・増補「国史大系」)、『山科家系譜』(宮内庁書陵部所蔵、山科言繩編)

(14) 田端泰子「乳母の力」(吉川弘文館、二〇〇五年)

本書では公家の乳母の家に出自を持つ高階家について詳説されている。

(15) 菅原氏によると、建久三年三月の後白河御起請符(白河院序下文)により、高階榮子に与えられた所領は二十一箇所であり、この内山科家に伝領された所領は、山城国山科小野庄、同沢殿、遠江国西郷上村、美濃国尼寺庄・得満・塩田・神護寺、信濃国住吉庄、阿波国一宮、播磨国揖保・桑原保、備前国居都庄、備中国英賀庄であった。(菅原Ⅰ、四八頁)

(16) 『山城名勝志』巻十七(新修京都叢書第十四巻、臨川書店、一九七一年)

(17) 『教言卿記』応永十二年八月十二日条、「法住寺殿山科御影供料足百文、任例進上之」

『山科家礼記』長祿元年十一月十二日条「はうちう寺殿へ十疋御糸いの供物下行」

『言国卿記』文龜二年十二月十二日条「法住寺殿御供料三十疋下行」

『言継卿記』永祿七年三月十三日条、「後白河院御聖月也、長講堂に不参之間、於此方焼香申候了」とあり、少なくとも言国の代までは供物料を下行していたことがわかる。

- (18) 『山科御影堂領事書案』(宮内庁書陵部所蔵『山科家古文書』)
- (19) 『山科家礼記』 応仁二年三月十三日条に「御影ハ東庄御影堂ニ御座ノ御影也、御年四十二ノ御自筆也、当所御影堂焼上之間法住寺殿へ入申也、」とある。
- 『山城名勝志』 三百六十二頁
- (20) 『言国卿記』 文明十年七月十三日条
- (21) 『山科家礼記』 応仁二年二月二十九日条、三月九日条、六月三日条など
- (22) 『山科家古文書』 四、「院宣案殺生禁制事」(貞治三年三月十日)
- (23) 『山城名勝志』 によると、「山科新御所」の解説に「土人云御所森在大宅村與大塚村間又大宅村氏神山呼御所山此謂不奮塚」とあり、山科御所は大宅村と大宅村の境辺り、御所山の麓ということになる。また『京都府山科町誌』(六十九頁)には、山科東野にある白河寺址を山科御影堂と比定しているが、『山科家礼記』『言国卿記』を見る限り疑問である。
- 『山城名勝志』は「白河寺」の寺内に「後白河院石碑」があると解説しているが、この石碑は中世の東庄御影堂にあった「後白川御ハカ」であろう。当庄が天文十七年に山科家の知行を離れた後は御影堂も荒廃し、石碑だけ残ったと推測すれば、「寛文中開山派愚堂末上之徒無明再興之云々」の解説に従い、開山派無明により東野の地に再興された白河寺に先の石碑が安置されたと考えの方が妥当であろう。
- (24) 山科家二流の所領争いの経緯は注(12)の白井論文に詳細に述べられている。
- (25) 注(6)の①
- (26) 『教言卿記』 応永十四年九月十七日条。
- (27) 『康永元年教兼契状案』(『山科家古文書』下)
- (28) 『山科家礼記』 長享二年九月六日条では林殿の栗は「中」の等級を付されている。
- (29) 『山科家古文書』『教成卿遺領事』
教房朝臣遺領備前国居都下村、播磨国下揖保庄、備中国英賀庄皆

- 部村、
美濃国尼寺庄等事、弘安被召文書正文、両方可守遺領之由聖斷了
任教頼朝臣讓可相伝領掌、者
院宣如此、仍執達如件、
正安三年二月十二日
冷泉中将殿 判奉
- 追仰 山階東庄無量光院上御所等事、雖不可有子細、追
可被仰之由、同所被仰下也、 (傍線筆者)
- (30) 『山科家古文書』 下、康永元年九月教兼契状案(後闕)
「以和睦之儀、備前国居都庄下村、美濃国尼寺庄久得郷・同得満并山科東庄内無量光明院林等、永代僻賜之間、自今以後永所止訴訟也」(注(8)菅原1、六五頁、傍線筆者)
- (31) 注(12)白井前掲論文五三頁を参照
- (32) 注(23)を参照。
- (33) 京都府山科町役場編集、臨川書店、一九七三年
- (34) 『教言卿記』 応永十三年九月四日条には林殿以下大臺、四松殿、大峯の四ヶ所の栽培地が記載。
なお、東庄鎮守社の東岩屋神社からは月始めに山科家へ御供が貢納されている。
- 例『山科家礼記』 長祿元年十二月二日条、「東庄より御供二前上候」、又乱中の文明九年二月一日条では「供御鯛一懸・カサメ七・一桶三十疋也」が届けられている。
- (35) 『山科家礼記』 明応元年九月十八日条。
- (36) 注(35)に同じ。「大林ト申候ハ大澤寺之栗候也、栗〇一斗七升納、本ハ三斗候也」なお、『同』 文明十二年九月六日条には、大竹村の栗の未進について「大澤寺御存知候也、曲者也、去年定又如此被申之、」との久守の添書があり、大林の栗の貢納量で両者の見解が違っていることがわかる。
- (37) 『山科家礼記』 文明十二年七月十三日条。

(38) 『言国卿記』 文明十年七月十三日条。なお十三日は後白河院の月忌である。

(39) 『山科家礼記』 文明十八年七月十八日条。山科大宅郷に棟別百文の段銭が賦課された時、在家数が調査される。結果は「棟五十、庵此外八」とあり、計二貫文を提出している。

(40) 『教言卿記』 応永十三年九月十四日条。

(41) 『山科家礼記』 長享二年八月七日、九月一日条、「当年御所山うりとし二てうり候、」とあり、東庄は用益権を五貫文で買っている。五十一軒の在家が柴一荷宛二十五文を支払っている。

なお、領主の山野占定と村落の支配についての論考は以下に代表される戸田芳実「山野の貴族的領有と中世初期の村落」(『日本領主制成立史の研究』岩波書店、一九六七年)、坂田聡「中世在村寺院の村堂化の過程」(『日本中世の氏・家・村』第三章、校倉書房、一九九七年)

(42) 『山科家礼記』 長享二年正月四日条には「大宅里八家一間二もちい甘まい、まめ一升宛、代ハ五十文也、山口卜申、なきの辻ハ一間にはなひら十まい、代十文也」とある。

(43) 『山科家礼記』 長享二年二月十二日条。「公方山アセ候事」とある。御所山＝公方山。

御所山の用益については、領主・庄民共同で定められた禁制があった。『山科家礼記』長享三年五月二十九日条には、「定禁制條々」として三箇条の規則が記されている。要約すると以下である。

- ① 山守の管理不備の場合は入山を禁じる。
- ② 戌の時以降に刈り取った草や薪を持つ者がいたらその場で成敗する事、もし昼間に山守以外の者であれば、切株と切り口が一致したら、同じく成敗する事

③ 山守の下人などが柴木を盗めば本人は成敗され、山守衆も責任をとって、三百疋を弁償する事、山守五人の内一人でも見逃したり置えば、追加で五貫文を出すべき事

(44) 『教言卿記』 応永十三年四月二十二日条。

(45) 『教言卿記』 応永十六年閏三月二十八日条。

(46) 『山科家礼記』 明応元年十二月十五日条、「岩屋社供僧事、別当泉蔵坊申、」

(47) 『山科家礼記』 文明十二年三月十三日条、「大澤寺坊主セイハン」

(48) 山科家へ納める公事は文明十二年の段階で次の通りである。

正月若菜・三穂打竹、三月蕨、四月岩梨、五月柴・蓬・筍、六月ヤマモモ・柴・茅草、七月盆供の茄子、八月八朔祝・蕎麦、十月柚子、十二月歳暮。この内禁裏へ贈答されたものは岩梨だけである。他は、菅浦が隔年に貢納する枇杷も献上された。

(49) 注(8)の田端前掲書、志賀正前掲論文。藤木久志「戦国の村を行く」(朝日選書五七九、朝日新聞社、一九九七年)、注(9)の拙稿。

(50) 『山科家礼記』 第五卷末所収の解題に大澤久守の履歴がまとめられている。

大澤久守の専論として以下が挙げられる。

菅原正子「山科家の家司大沢久守と山城国山科東庄―在地武士としての一考察―」(『中世の武家と公家の「家」』吉川弘文館、二〇〇七年)

(51) 山科家の坂本における疎開生活を扱った論文は以下である。
下坂守「坂本の寺家御坊と山科家」(木村宏至編『近江の歴史と文化』思文閣出版、一九九五年)、大塚浩美「室町時代中期の坂本の暮らし点描 山科家の日記から」(『朱雀』第十四集、二〇〇三年)

(52) 『山科家礼記』 応仁二年十月二十日条、久守は政所衛門入道を召して、未進の折檻をする。二十四日には「衛門入道栗一斗納、すぐに勧修寺進也、但六升栗也」とあり栗の未進を譴責した事がわかる。

(53) 乱中に栗を贈答した例は、『山科家礼記』にある次の数例のみを挙げる。
応仁二年細川勝元へ二籠、飯尾為信へ一籠、勧修寺へ六升、文明三年(坂本寺家家族へ一籠)、文明四年(広橋綱光へ二囊、言国室へ百粒、坂本寺家一籠)位で、栗そのものが枯渇していたと同時に、乱中における管理の不備、収穫時の労働力不足の問題もあったと考える。

(54) 『山科家礼記』 文明九年十一月三日条

- (55) 『言国卿記』 文明十年九月十三日条
- (56) 『長興宿禰記』 文明十一年八月一日条。「禁裏外様御憑被停止之」と公家間の八朔儀礼はまだ停止中である。本格的な復活は翌年であった。
- 『晴富宿禰記』 文明十二年八月一日条には「今日、八朔禮、一乱以後興行、公方方如先規進上内裏、」とある。
- (57) 『長興宿禰記』 文明十二年十三日条。その他『後法興院政家記』『親長卿記』『宣胤卿記』『大乘院寺社雜事記』『山科家礼記』『お湯殿の上の日記』などに記載。
- (58) 応仁・文明の乱後の政治体制についての先行研究は以下に代表される。
- 永島福太郎『応仁の乱』(天文堂、一九六八年)
- 百瀬今朝雄『応仁・文明の乱』(『岩波講座日本歴史』中世三、一九七六年)
- 鳥居和之『応仁・文明乱後の室町幕府』(『史学雑誌』九六編二、一九八七年)
- 設楽薫『足利義尚政権考―近江陣中における「評定衆」の成立を通して―』(『史学雑誌』九八編二、一九八九年)
- 野田泰三『東山殿足利義政の政治的位置付けをめぐって』(『日本史研究』三九九、一九九五年)
- 石田晴男『応仁・文明の乱』(吉川弘文館、二〇〇八年)
- (59) 『山科家礼記』 延徳三年九月二十日条。
- (60) 注(8)の田端泰子前掲書。田端氏は栗年貢の特性を「領主からの恣意的なもの」と指摘している。注(9)拙稿においても、栗貢納と柿貢納の比較において栗年貢を考察した。
- (61) 『山科家礼記』 応仁二年三月二十五日条、「今度世上之儀、大方殿東福寺置被申、然処敵寺中可乱入之由必定間、御迷惑之間、先山科邊マテ御出アルヘキノ由被仰候間、」とあり、大方が北殿と思われ東福寺に居住していることがわかる。また言国の実母も北殿と呼ばれ、美濃に嫁した娘(言国の妹)共々在国していると推察され、「美濃北殿」と区別されている。(『同』 文明二年五月九日条)
- (62) 『山科家礼記』 延徳三年九月二十一日条。
- 貢納者からの購入なので原価の可能性もあるが、五〜六升で百文が栗の流通価格であったと考えてよいだろう。
- (63) 『山科家礼記』 長享二年同日条。
- (64) 『言繼卿記』 天文十四年八月一日条、「栗枝如例年到、。(いが栗の付いた枝)
- (66) 『教言卿記』 応永十三年九月十二日条。「裏松へ如例煎栗一合進之」
- (65) 『山科家礼記』 長祿元年十月七日条に、「山科より御年貢栗上候也」とあり量は不明ながら、同日に地下に栗の折四種を注文している。贈答先は管領細川勝元と前管領畠山持国、三宝院義覚、日野富子、日野勝光、烏丸資任など義政の側近ばかりである。改元に伴う代始の期待も含意された贈答である。家司久守も時の有力奉行人飯尾為種・為数・之種・之清などに贈答しており、義政治世下、奉行人の地位の上昇を読みとれる。義政の將軍親政は、贈与行為が儀礼として室町殿へ収斂して行く画期の時代とも言える。
- (67) 注(53)を参照。
- (68) 『言国卿記』 明応七年十一月十四日条。言国は同月三日の久守の逝去後ほどなく、東庄の直務宣言を行う。
- (69) シーズンオフに栗を贈った例の内でも最も遅い時期は六月の勤修寺西林院への一裏であった(『山科家礼記』 文明十二年六月十七日条)。逆に払底するのが最も早かったのは明応七年三月十三日であった。どちらも久守が管理している。
- (70) 『山科家礼記』 長享二年以降明応元年まで贈答先的大幅なリストが記載されるようになる。
- (71) 『言国卿記』 明応二年四月十一日条。久守は世務を辞退し、嫡男に兵衛尉重致に譲る。
- (72) 途中の文明十八年の『山科家礼記』は九月九日〜十一日が欠損しているが、九日に東庄より籠が調達され、十一日には、「いつもの寺家殿・御料人」に「栗一籠」を進物しているので、家の恒例行事として定着し

ていた考える。

- (73) 『長祿二年以来申次記』（『群書類従』二十二輯武家部）には「別而細々伺公之人」として、日野家・三條家・烏丸家・飛鳥井家・廣橋家・中山家・高倉家・伯家等を記載。

- (74) 史料六の贈答先の幕府女房と思われる「武家藤宰相局、同小宰相局」も父親の家名を名乗る当該期の慣わしから見ても、高倉永継の娘或いは姉妹である可能性が高い。

- (75) 『山科家礼記』延徳元年九月十八日条。

- (76) 注(51)を参照。

- (77) 『言国卿記』明応三年七月三十日条、「本撰寺へ申後之事申合也、とある。

瀬田勝哉「『青年貴族の異常死』（『洛中洛外の群像』失われた中世京都へ）平凡社、一九九四年」

- (78) 『言国卿記』明応三年九月二十七日条。

- (79) 『言国卿記』明応三年九月二十六日条。「今日ハ籠共不出来間、禁裏先不進上之、」

- (80) 『言国卿記』明応三年九月二十九日、「禁裏伊予局硯フタ栗一ふた遣之、其返事ニムシリタル御綿二十文目ワタホウシニヨトテ送賜、」

- (81) 下川雅弘『山科家礼記』にみる贈答とその機能」（『研究紀要』七五、二〇〇八年）

- (82) 伊藤幹治・栗田康之編『日本人の贈答』（ミネルヴァ書房、一九八四年）
『お湯殿の上の日記』（続群書類従補遺三、一〇一十一巻、続群書類従完成会）

なお、通覧すると八幡善法寺や葉室家からも栗籠が献上されている。

- (83) 『言国卿記』文明十年九月十四日条。

久守の父重康は文明四年八月に没したので、乱後の代替りの安堵である。

- (84) 注(9)の菅原前掲書IIを参照。

- (85) 『長興宿禰記』『大乘院寺社雑事記』とも長享元年九月十二日条。

- (86) 『大乘院寺社雑事記』『山科家礼記』とも延徳三年八月二十七日条

- (87) 注(58)の前掲設楽論文。

- (88) 『群書類従』29輯雑部

- (89) 注(58)の鳥居・設楽・野田前掲論文。

- (90) 幕府奉公衆に関する参考文献を掲げる。

福田豊彦「室町幕府の『奉公衆』——御番帳の作成年代を中心として——」（『日本歴史』二七四、一九七一年）

- (91) 本論と関連する、幕府奉行人に関する参考文献を掲げる。
桑山浩然「室町幕府の権力構造——『奉行人性』をめぐる問題——」（『豊田武・ジョン・ホール編』『室町時代——その社会と文化』吉川弘文館、一九七六年）

小泉義博「室町幕府奉行人奉書の充所」（『日本史研究』一六六、一九七六年）、青山英夫「室町幕府奉行人についての一考察——文明期の場合——」（『上智史学』二五、一九八〇年）、今谷明「幕府奉行人奉書の基礎的考察」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一、一九八二年、後に『室町幕府解体過程の研究』岩波書店、一九八六年、所収）、山家浩樹「室町幕府の賦と奉行人」（『石井進編』『中世の法と政治』吉川弘文館、一九九二年）

(92) 『大乘院寺社雑事記』長享元年九月十七日条。大乘院尋尊も近江国豊浦庄の回復に力を入れるが、着陣祝の酒肴の贈答先は、飯尾加賀守、松田丹後守、二階堂判官、伊勢兵庫頭、高倉殿父子である。

(93) 『大乘院寺社雑事記』長享二年正月二十一日条に「結城七郎方へ江州守護職の御礼馬・太刀被遣之、」とある。また数日後陣所に参賀した東大寺尊勝院は夜分強盗六十人に襲われ半死半生となる。下手人は「結城七郎内者」であった。（『同』正月二十七日条）

(94) 『大乘院寺社雑事記』長享元年十月二十七日条。「近習者共九ヶ条訴訟事任之、（中略）」

結城七郎任雅意事可申上云々、と布陣後はどなく不和が生じている。

(95) 鳥居和之氏は、注(57)前掲論文の中で、義政と義尚の相剋を「二つの將軍観」と定義付けている。義尚は京都を離れることでしか將軍たりえ

なかったのである。

- (96) 『大乘院寺社雜事記』長享三年三月二十七日条。なお側近二階堂山城守は遁世して高野山へ、結城七郎も高野山に遁世する。(『同』四月十二日条)

- (97) 設楽薫「將軍足利義材の政務決裁」「御前沙汰」における將軍側近の役割」(『史学雜誌』九六、一九八七年)、
II「足利義材の没落と將軍直臣団」(『日本史研究』三〇一、一九八七年)。

- (98) 『大乘院寺社雜事記』長享三年三月二十九日条、「説者、伊豆之鎌倉殿御息可然旨細川申云々、号慶嚴院殿京都二御座也」(傍線筆者)とある。

- (99) 青山英夫「文正の変」に関する覚書」(『上智史学』三一、一九八六年)

- (100) 『後法興院記』延徳三年八月二十七日条には、出陣の交名が書き留められている。その中に護持僧として、「妙法院」なる僧が見える。この人物は三寶院内の僧であり(『大乘院寺社雜事記』同日条)、葉室教忠の舎弟である(『長興宿禰記』延徳二年九月七日条)。義尚の護持僧が弟の三寶院義覚であったことを意識している。

『山科家礼記』同日条には、家職からか、將軍以下御陣衆の装束の感想が記されている。

- (101) 『晴富宿禰記』明応二年四月二十三日条。

- (102) 『大乘院寺社雜事記』明応二年閏四月五日条。

- (103) 『山科家礼記』延徳三年七月二十三日条。三カ年限定、京着百貫文と土産の請切契約。

- (104) 『山科家礼記』延徳三年五月十九日条。

- (105) 『山科家礼記』延徳三年七月十四日、二十九日条。

- (106) 『山科家礼記』延徳三年八月二十六日条。

- (107) 『山科家礼記』延徳三年八月二十九日条。

- (108) 『山科家礼記』延徳三年九月二十二、二十五日条、十月三、五、十二日条。

- (109) 『山科家礼記』延徳三年十月二十六日条。東庄より「柿籠二・ヒノ木葉上候」

- (110) 『山科家礼記』明応元年十月三日条。

この人物は葉室光忠に供奉したり、申次を行う与力的存在である。かつて斯波家の花会で同席したり、花器を下賜されるなど久守との立花の交流も所見される。なお、松殿忠顕に関する論考としては、川嶋將生「戦国期の公家」と將軍・松殿忠顕を事例として「(公家と武家Ⅱ」思文閣出版、一九九九年)がある。松殿忠顕は当該期、葉室共々一条家の家司であったことが言及されている。

- (111) 『山科家礼記』『晴富宿禰記』明応二年二月十五日条。『大乘院寺社雜事記』同年二月十七日条。出陣直前の二月一日に葉室光忠は義材の執奏で家格を越える大納言に昇進する。

- (112) 『言国卿記』『晴富宿禰記』『大乘院寺社雜事記』明応二年四月二十三日条、河内出陣から明応の政変までの経緯は『大乘院寺社雜事記』『晴富宿禰記』に詳しい。

- (113) 注(97)設楽前掲論文Ⅱ、青山英夫「明応の政変」に関する覚書」(『上智史学』二八、一九八三年)、山田康弘「明応の政変直後の幕府内体制」

- (『戦国期室町幕府と將軍』吉川弘文館、二〇〇〇年)

- (114) 『晴富宿禰記』明応二年四月二十三日条によると、葉室邸・金光院邸・葉室寺(浄住寺)・松殿邸も悉く炎上、義材の妹疊華院の御座所の三条通玄寺にも賊が乱入、略奪行為を働く。翌暁、葉室谷も炎上する。五月二日に義材が捕縛された時、妙法院は行方を眩ました。松殿女中も避難先で落命する。(『大乘院寺社雜事記』閏四月十五日条)

- (115) 『言国卿記』『大乘院寺社雜事記』明応二年五月二日条。「葉室大納言光忠卿ハ二十九日生涯云々、言語道断次第也」と言国は記している。

- (116) 家永道嗣「室町幕府將軍権力の研究」第二部「応仁・文明の乱の東国問題と將軍権力」に守護大名としての斯波義敏について詳論されている。また義敏が家督を継ぐまでの斯波氏についての論考は、小泉義博「室町期の斯波氏について」(『北陸史学』四二、一九九三年)

(117) 『山科家礼記』 文明十八年三月二十日条が初見。久守は義敏と岩屋社の供僧泉藏坊と同道して立花を見た後、自宅で花を立て披露する。この段階では頻繁な交流はない。

(118) 義政の出家の直接の原因は文明十七年に五月二十三日に勃発した奉公衆と奉行人の対立に憤慨した結果である(『藤涼軒日録』同年六月十五日条)。この事件に関する論考は以下に代表される。注(96)の前掲設楽・論文と野田論文、藤木英雄『藤涼軒日録―室町禅林とその周辺』(日記・記録による日本歴史叢書古代・中世編、そして、一九八七年)。

(119) 「山科家」と「たて花」―中世末期公家社会の文化史的考察―(『立命館史学』二六、二〇〇五年)なお、本論成稿後、小森崇弘『戦国期禁裏と公家社会の文化史』(小森崇弘著書刊行委員会編・刊、二〇一〇年)が発行され、右の論文も所収された。

(120) 注(119)の小森前掲論文を参照。『山科家礼記』や『言国卿記』の中に「場」としては、坂本浜の道場、洛中の七條、六條、四條道場忍庵、斯波邸、谷川邸、「人」としては池坊、存阿弥、ほう英、飯尾大和守、斯波義敏一門などが出てくる。

(121) 甘露寺元長は言国室の妹の婚家先であるが、此の場合申次に対する久守の表敬とみる方が妥当である。

(122) 『山科家礼記』長享二年九月六日条。

(123) 『山科家礼記』長享二年十月十三日条。義敏より「花葉抄」を借りている。

(124) 『山科家礼記』延徳三年九月二十一日条。久守は七人の要管理者から三斗四升五合計六百五十文分を購入している。

(125) 『言国卿記』明応二年十月二十六日条。「今日早々長門守参、又世務辞退也、年ヨル間斟酌之由申之、所々知行以下此方ヨリ可申付之由申之、兵衛尉可申付之由申聞了」

(126) 『言国卿記』明応三年五月三日条。「長門守上洛、昨日入道ナルト云々、大澤寺住持戒師也、」

(127) 『言国卿記』明応七年三月十三日条。「自禁裏栗又所望にて御文在之、

長門申、早々私底ニテヤウヤウ三十出、雖少進上之了」とある。

(128) 注(119)小森I前掲論文

(129) 『言国卿記』明応三年七月三十日条。注(76)瀬田前掲論文も参照されたい。

(130) 『言国卿記』明応七年十一月十一日条。

(131) 『言国卿記』文亀二年十月四日条

(132) 『山科家礼記』文明九年九月二十二日条には「丹波栗供御人」の交名がある。また『同』応仁二年五月十九日条では、「栗御代官」の一橋与五郎の名があり、「丹波屋」として毎年九月九日に栗三升を納めている。『同』文明十二年九月九日条

(133) 日本中世の贈与概念に関する主な参考文献。

網野善彦・阿部謹也対談『中世の再発見』(平凡社ライブラリー、一九八二年)

金子拓『進物折紙考―室町時代における贈与交換の側面』(『古文書研究』四三、一九九四年)

桜井英治『折紙銭と十五世紀経済』(『中世人の生活世界』山川出版、一九九六年)

「日本中世の贈与について」(『思想』八八七、一九九八年)

『日本中世の経済構造』(岩波書店、一九九八年)

「御物」の経済―室町幕府財政における贈与と商業(公立歴史民俗博物館研究報告九二、二〇〇二年)

「室町人の精神」(『日本の歴史』一一、講談社、二〇〇六年)

下川雅弘『贈与論と日本中世史研究』(『史叢』七七、二〇〇七年)

(134) 『言国卿記』明応七年四月七日条には、「地下満所將監万歳スルト云々、宮其外此方へたひし緩急者之間、シカシナカラハチ也」とあり、政所の死を罰と記す。また『同』文亀二年九月二十一日条には「未可納者在之トイへ共、調流遣度事在之由申之間、可遣之由申了、」とある。

(135) 『言繼卿記』天文二年十月三、七、二十日条。政所より一斗納められるが、未進分は米二斗七升で弁済されている。

(136) 『言繼卿記』 天文十七年五月二十八日条。この年は九月十七日に「庭前之栗」を一盆、親王御方に進上する。以後言繼は庭の栗を禁裏へ贈答することになる。

(137) 黒川道佑『雍州府志』 卷六土産門(京都叢書刊行会、一九一六年)

(138) 注(9) 拙稿

(139) 『言緒卿記』 元和五年正月十三日条

一、禁中江如例年三毬打十本致進上、文言案、

かしこまりて申あげ候、三きつちやう十はんあとのまゝに志んしやういたし候、

志かるへきやうに御ひろう候て下され候へく候、かしく

『同』 元和五年正月十四日条

一、板倉伊賀守札ニ御出、礼物青銅百疋、伊州取次三矢吉兵衛也、言聡へモ同前、

(140) 岩上道子「近世禁裏御料と山科郷土」(『京都市歴史資料館紀要』第一六号、一九九九年)